

京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2009年度

1. 京都市立高倉小学校との連携

教育方法学講座教育方法分野（以下、教育方法研究室と記す）では、「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」を合い言葉に、2003年度から京都市立高倉小学校（以下、高倉小と記す）との共同研究、通称「プロジェクトTK」に取り組んでいる。「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」という合い言葉は、「子どもが育つ」という目標に向かって、先生と院生が協働して取り組み、その中でお互いに実感した自身の成長を言葉に表したものである。

プロジェクトTKは2009年度で七年目を迎えた。初年度から共同授業研究に参加しているメンバーは数人になり、高倉小、教育方法研究室ともメンバーの入れ替わりが起きている。メンバーには、これまでの研究蓄積に学び、その年の研究成果を次年度に伝えていくことが求められている。



▶2009年度教育方法研究室メンバー

プロジェクトTKは、教員ではなく教育方法研究室内の院生が主導で行っているプロジェクトである。共同研究の方向性や学校との関わり方も院生集団に決定権がある。院生が主体となった小学校との共同研究は、全国的にも珍しいのではないだろうか。

院生主体の研究という特性上、プロジェクトTKは教育方法研究室内の共同研究の中でも重要な位置を占めることとなった。院生の教育方法学者としての力量形成に寄与している部分も大きい。プロジェクトTKは、集団での共同研究に取り組む場であるとともに、個人が理論と実践との関係を考える場にもなっているのである。

2. 院生の活動

高倉小での院生の活動には、二つの柱がある。一つ目は、授業観察である。院生は日常的に教室に入り、各自でノートを取りながら授業を観察する。「授業は

先生のもの」という立場から、院生が授業の補助をしたりすることはない。あくまでも観察することに徹している。授業を見せて頂いた後には、先生に対して何らかの形でフィードバックを行っている。休み時間の前の授業であればその場で話すこともあれば、感想等を書いて先生にお渡しすることもある。先生だけではなく、教育方法研究室内の院生に対しても、いつ・どの授業を行ったのかを授業の感想を添えて報告するようにしている。また小学校の研究授業や研究発表会に際しては、先生の許可をいただいた上でビデオやカメラを用いてのデジタルな記録を残したり、詳細な授業記録を起こしたりするなどして、様々な形で記録を蓄積することにもつとめている。蓄積された記録は、院生内で定めた情報共有ルールに乗っ取り、プライバシーを配慮した上で高倉との共同研究に活用している。

二つ目の柱が授業づくりへの参加である。この活動は、高倉小学校の研究単位である教科等部会に院生が参加することで行われている。院生は先生方の指導案を見せていただき、目標や単元構成、手立てなどについて、一緒に検討を行っている。先生の要請に答える形で理論研究の知見や資料を提供したり、普段の授業観察から子どもの様子について議論したりもしている。指導案検討に参加することによって先生と課題や授業のねらいを共有し、その解決や達成に共同して取り組んでいる。私たちはこのような自分たちの関わり方を「伴走者」としての関わり方と呼んでいる。

先生方と課題や授業のねらいを共有することは、授業観察にとっても重要な意味を持っている。授業を観察する際の視点を先生と共有し、授業で注目すべきポイントが自ずと定まってくるからである。

授業が終わると、事後検討会が開かれる。議論の焦点は、指導案検討をする際に出てきた課題や授業のねらいと子どもたちの学習の様子である。先生が授業で試みられた手立てや授業の様子を言語化して残し、先生方と共有することも行っている。授業の様子を文章化したものは、「院生さんの目」という形で、高倉小学校の研究紀要に掲載されている。

このような授業観察と授業づくりへの参加は、研究授業と研究発表会の単元を中心に行われている。指導案検討を通して単元のねらいを知り、授業観察を通して先生と単元の授業の様子を共有し、事後検討会で単元のねらいを先生と検討する。高倉小学校での院生の活動は、単元づくりへの参加と言い換えることができる。

3. 研究の変遷

7年間のプロジェクトTKの歩みを振り返ると、そこには大きな転換点が二つある。一つ目は2007年に学力向上部会（2008年度から教科等部会）に参加するようになったこと、二つ目は2009年度に共同授業研究の対象を算数に絞ったことである。

学力向上部会は、2007年度に高倉小の校内研究組織として設置された。院生は学力向上部会に参加し、各教科の授業を踏まえたうえで、教師たちと通教科的なテーマを探究することになった。2006年度までは、大学院生は各教科に分かれ、各教科の課題に沿って研究を行っており、学力向上部会への参加は共同授業研究の課題設定の仕方に大きな変化をもたらしたといえる。

2007年度はグループ学習をテーマとして設定し、主に算数と理科の授業観察を行いながら、よいグループ学習のあり方を定型化したり、高倉小で行われてきた典型的な授業スタイルにグループ学習がどのように位置づけるのかを検証したりした。2008年度はワークシートをテーマとして設定し、子どもの学習を促進させるためにはどのようなワークシートが有効であるのかを、社会科・算数・理科の授業から一般化することを試みた。

このように2008年度まで授業観察は複数の教科で行われてきた。この研究体制は、「面と面」と呼ばれた教師集団と院生集団との関係を基礎としていた。2009年度、授業観察を行う教科を算数に絞ったことで、教科等部会では教師集団と院生集団の関係は維持されるものの、授業のレベルにおいては特定の教師と大学院生との関わりが基本となったのである。

2009年度の研究テーマは「思考力を深める記述指導」である。大学院生は、算数で教科等部会の課題に取り組んでいる先生との授業づくりを行うことで研究を進めている。

2009年度の研究の大きな特徴は、子どもの発達段階を意識した授業観察や教材研究に取り組んでいることである。6年間の発達段階をどのように描くのかは、学力向上部会が設置されたときから意識されてきた課題である。

教材研究を行う場合、研究授業の単元のみを研究するのではなく、教科書指導書の系統表などを参照しながら、関連する単元の教材研究を合わせて行っている。そこからは、教科書がどのような発達段階を描いているのか、各学年でどのような学習成果を求めているのかが明らかになった。教科書だけでなく、教師たちが行った研究授業の単元間の関連を捉え、研究授業の成果が次の研究授業にどのようにつながるのかを明らかにしている。

授業観察は、教材研究や教師との話し合いから導き出された発達段階を念頭におきながら行っている。各時間の学習成果を検証することはもちろん、6年間を見通した場合、各学年にはどのような思考が可能なのか、どのような課題があるのかを教師たちと話し合っている。

子どもの思考や学習成果を捉える際には、授業観察だけでは不十分である。今年度は子どものワークシートを収集し、授業での様子と関連付けて捉えることで、子どもの思考を読み取ることを試みている。



▶ 授業観察の様子

4. おわりに

プロジェクトTKの成果は、院生が科研報告書にまとめたり、学会で発表を行ったりすることで公表を行っている。研究成果は、教科の研究から通教科的な研究まで多岐にわたっている。こうした分厚い研究成果を未来に向けての研究にどのように活用していくのかが今後の課題となるだろう。

(文責：徳永 俊太)